

<実践哲学としての「コミュニティ・デザイン論研究」を目指して>

3rd フレーム「What?文化」ワーキング

A. 話題提供（ライフヒストリー・テーマの変遷から）※

話題提供者：

弘本由香里（大阪ガスネットワーク エネルギー・文化
研究所 特任研究員）



「地域資源・風土から問い直す、コミュニティ・デザイン」

1. 研究のバックグラウンド・価値観の源泉

私の場合は、アカデミックな研究を専門にしている立場ではありませんが、CEL（大阪ガスネットワーク株式会社 エネルギー・文化研究所）での活動の前史から、簡単にお話しできればと思います。

原点までさかのぼりますと、高度経済成長期に山口県岩国市あたりで生まれ育っていますが、大学に進学して郷里を離れるまで、ダムのある山間地や、広島を中心市街地、郊外住宅地、そして旧西国街道の宿場集落と、様々な環境を経験しました。筑波山麓の原野に拓かれた大学では、現代美術を学びました。その後、東京でエジプトの宝物展プロジェクトの事務局員等を務め、20代後半で関西に移ってきました。

30代半ば近くまで宝塚市内で暮らしていましたが、1995年の阪神・淡路大震災で被災して大阪へ避難・移住し、2001年以降は上町台地で暮らしています。改めて居住履歴を振り返ってみると、常にヨソ者的な存在であったことが思い起こされます。

大きな転機となったのは、住宅建築専門誌「新住宅」（1946年再生復刊、1992年休刊）との出会いでした。同誌が事実上の廃刊となるまでの数年間、編集に携わったことがきっかけで、その後、住まい・まちづくりの世界に入っていくことになりました。

同誌から受け継いだ人的ネットワーク等を活かすべく、CEL（当時は、大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所）という組織で研究活動に取り組むこととなりました。愛称のCELのCはカルチャー（文化）、Eはエネルギー・環境、Lはライフ（生活）を指しています。生活者の視点に立ち、長期的な時間軸の中で、これからの社会の在り方を考え発信することをミッションとする組織で、企業の中に外部に開かれた窓を設けるといいますか、ある種の余白のようなものを置いておくという意味で、非常にユニークな組織として構想されたものでした。1986年に設立され、今年で37年になります。

私自身は、「新住宅」から移っていった経緯もあり、当初は住まい分野を主にしながら、暮らし・都市文化・まちづくりというように徐々に活動分野を広げていきました。その間に、高田光雄先生とのご縁で、大阪市立住まい情報センターと住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）の開設・運営にも関わり、住むまち・大阪の歴史の再評価に関心が向いていき、都市居住文化をどんなふう捉え、それを現代にどう生かしていくのかという視点で、『大阪 新・長屋暮らしのすすめ』という本をまとめ、長屋文化を再評価し再生を後押ししていくための仕事などにも取り組みました。

並行して、同じく高田光雄先生とのつながりで、大阪・上町台地をフィールドとしたま

ちづくりにも関わるようになりました。1990年代の終わりから2000年代初めにかけて、次々と登場してきた、新たなまちづくりのキーパーソンをネットワークして、「上町台地からまちを考える会」を立ち上げ、新たな都市居住文化を涵養するコミュニティ・エンパワーメントの連鎖を生み出していこうといった試みでした。

この組織は10年ほどで解散するのですが、たまたま上町台地に大阪ガス実験集合住宅NEXT21という場があり、CELの立場で私にできることとして、上町台地からまちを考える会で出会った方々との関係性や、歴史に裏打ちされた多彩な地域資源を発展的に活かして、人と人、人とまちの新たな関係性を紡ぐ、コミュニケーションデザインに取り組むことができないうかと思えました。

私が編集というアプローチで仕事に取り組んできた人間であること、住まい・まちづくりに関わってきた者であること、それらを融合させた取り組みを目指していきました。具体的には、大阪ガス実験集合住宅NEXT21の第3フェーズ実験が企画されていた際に、それまでNEXT21では地域との関わりがあまり持たれていませんでしたので、そのためのコーナーがあってもいいのではないかということで、地域コミュニケーションデザイン実験(U-CoRoプロジェクト)を提案して取り組みました。

1階の通りに面したガラス箱のような部屋を活用してウィンドウディスプレイを行い、そこに地域のいろいろな属性のプレイヤーの方に関わっていただき、「地域文化の再発見」「多世代・多文化共生」「減災文化の創造」「自然・環境の再生」といった切り口で、15のテーマを設けることで、横断的な関係性づくりや情報共有のようなことを行っていきました。

その頃、同志社大学の新川先生にも関わっていただいて、コミュニティビジネスの勉強会なども行っていました。当時、山口先生は大学コンソーシアム京都に勤務しつつ、阪大の社会人大学院生で、かつ「上町台地からまちを考える会」の事務局長でもありました。そこで、CELから大学コンソーシアム京都に、コミュニケーションデザインの調査委託をするようなことも行っていました。

その延長上で、同じく当時大学コンソーシアムの職員だった川中さんからの提案で、大学コンソーシアム京都の単位互換授業として、同志社大学の新川先生を受入先として「コミュニティ・デザイン論」の寄付講座を行いました。それを3年間やって、その後、同志社大学大学院総合政策科学研究科の科目にさせていただいて、今日に至っています。

それとは別に、過去に住まい情報センターなどでもご一緒していた川幡祐子さんが立ち上げた「一般社団法人大正・港エリア空き家活用協議会(WeCompass)」に理事として参加し、空き家をトリガーとした地域・社会課題解決を目指す事業に、CELの研究活動とリンクさせて取り組むといったことも行っています。

ざっくりといえば、大阪の居住文化の再構築や上町台地を中心としたコミュニティ・デザインの展開のようなものが相互に重なり合っていくようなことをやってきているのです。その際に、編集というアプローチが、一つの大きな軸になっていると思います。後ほどご紹介しますが、直近では上町台地をフィールドとした知の共有化の取り組みの一環として「上町台地 今昔タイムズ」の19号目を作っています。それらの成果を検証するといったことは、なかなか難しい分野だということも実感しつつですが、そこが一番の課題かもしれません。

価値観の源泉、ターニングポイントについては、田舎からまちなかまで、もの心付いて以来、どこに暮らしていても、自覚していたヨソ者としての微妙な立ち位置のようなものがあったということが、間違いなくあるだろうと思います。そのような中で、自分なりの居場所づくりの一環としての拙い表現、お絵かき、遊び、ものづくりなどに心が向かい、その延長線上でアートや民俗文化などに関心を持っていったのではないかという気もします。それから、関西への移住と編集ワークとの出会いによって、ヨソ者であるのだけけれども、人との縁に非常に恵まれていた。そこで、人や地域との関係性やアイデンティティを関西への移住者として紡いでいったという感覚があります。

それから、阪神・淡路大震災をきっかけとして、兵庫県から大阪へ転居し、大阪市立住まい情報センターの開設に関わっていったことで、住まい・まちづくり・都市居住文化への問いや学びが起きていきました。そして、上町台地からまちを考える会の立ち上げと解散につながっていくわけですが、ネットワーク組織というものを運営していくことの難しさを痛感するとともに、そこで得た関係性や資源を、CELという非常に柔軟な組織、ツールを持っている中で、わずかであっても、何か私なりに橋渡ししていくことができないだろうかと自問しながら、何かできないかということを考えていきました。

たまたま、これも非常に幸運なことに、皆さんと出会うことができ、「コミュニティ・デザイン論研究」という形で、社会にもう一回理論化して戻していく、さらにもう一回再度の実践として、空き家活用などにもそれを生かしていくという場面を得ることができました。

2. 活動の背景にある問題意識：CELでの議論から

社会そのものが構造的な変化の渦中にあり、これまでの方法論では解決できない問題が多発している中で、コミュニティ・デザインを考えていかなければいけないということが、「コミュニティ・デザイン論研究」の中で、一貫して問われていると思っています。

例えば、加速化する地域の多文化化への対応は喫緊の課題です。社会を支える外国ルーツの労働者の増加とともに、外国人シングルマザーと子どもたちの孤立と貧困など、見えにくい深刻な問題の一つです。一方、かつて地域の公共的な規範を支えてきた中間層の崩壊によって、地域に潜在する問題の共有や解決に向けた連携が難しくなっています。

また、生活単位も激変しています。今や、単独世帯が最も多い家族類型になっていますが、夫婦世帯や夫婦と子供等の世帯に関していえば、共働きが標準になっています。家族社会学の筒井淳也先生がおっしゃっているように、子育てのできるワーク&ライフスタイルを支えるローカルな労働市場と地域のサポートが鍵になります。

さらに、人口減少のドライブが、地域の自治の仕組み、事業や施設の再編を加速させており、地域の内外をつないでマンパワーと経済を循環させる、地域の生活文化を軸にした生業を生み出す地域と、そうでない地域というものの明暗が、明らかに分かれていっているような状況があります。

また、川中先生の同級生でもある村井琢哉さんがお話ししてくださったような、貧困が世代を超えて連鎖していくという問題、階層の固定化のようなことが起こっています。これに対して村井さんは、「対処ケアでは解決されず、本当に必要な支援とは何か。新しいモノサシをつくり、大きな価値観や文化・仕組みを見直していく必要がある」と、語られて

いました。社会構造そのものを変えていく、しかもそのときに文化というものを重視した考え方をしていかなければいけないということを強く語られていました。現世代間であれば、ぎりぎり文化の共有が可能なのではないか、ということをおっしゃっていたのが、非常に印象に残っています。

私は住宅・まちづくり政策分野、コミュニティ・文化政策分野、社会教育政策分野、社会インフラ政策分野に、民間人の立場でいろいろ関わってきたのですが、そこでは空間の再編やマネジメントが重要な課題になり、担い手・主体の在り方が強く問われるようになってきているという状況が明らかにあります。どの分野に関わっていても、論点として浮かび上がってきているということを感じています。

そのような課題と価値観の変化について、ざっくりと整理すると、グローバル化と技術革新の進行の軸と、少子高齢化と人口減少の進行の軸に対して、「加速する多文化化・格差と共生をめぐる課題」、「直面する地域の再編と自治をめぐる課題」、「深まる世代間断絶と次世代をめぐる課題」が膨らんでいっている状況が捉えられます。一方で、人々の市場観・地域観・人生観といったものに変化も見られます。個々のナレッジの持ち寄りや資源のシェアによる価値創造、問題解決スタイルとマーケットの希求。地域・風土とのつながりにオリジナリティやアイデンティティ、持続可能性を見いだそうとする価値観の広がり。個人と社会を直結する表現媒体の普及と、働き方や生き方の多様化という変化が起きている中で、ウェルビーイング、レジリエンス、持続可能性を支えるための新たな方法論や社会像のようなものが問われていて、そこにコミュニティ・デザインも関わっていかなければいけないということだと思います。

そのときに、日常であれ、非日常であれ、人のつながりや接続のチャンネルを担保することのできる多様性・包摂性、冗長性・融通性、再帰性・循環性を有する、時間軸も含めたコミュニティ・デザインの在り方を考えていかなければいけないのだろうということを、先生方と議論しているなかで感じています。

3. 構造的な課題を乗り越えていくための手がかり

生活者とコミュニティの関係性も大きく変化しています。特定の所属団体に縛られつつ守られていた生活の在り方から、自ら価値を選択し創造し、社会と関わり、自らを守っていかなければいけない、個々を起点にしたネットワーク型の規範をつくっていかなければいけない局面に生活が置かれている中で、改めて文化の役割は何かということが問われているし、自然や風土といったようなものがどのような意味を持っているのかが問い直されているのではないかと思います。

『親密圏と公共圏の再編成 アジア近代からの問い』落合恵美子編（京都大学学術出版会、2013）では、近代の核家族を基礎単位とした社会の考え方から、「第2の近代」というもの変わってきていることが示されています。かつては国家という枠組みの中に家族や個人というものが存在していましたが、今後は、市民社会の中に、部分的に融解しつつある国家や個人というものが存在しているという状態の中で、公共圏や親密圏をつくっていかなければいけないという変化が語られています。

そうした中で、いかに共同性のようなものを築いていくのか、ある種の社会規範のようなものを共有していくのかということになると、親密圏と公共圏をつなぐ知恵としての「中

間圏」を構想していくこと、いわば両者をつなぐアーリー的なものが必要になってくるのではないかということが説かれています。おっしゃるとおりであろうと、私もさまざまな動きを見ていて感じているところです。高田先生が NEXT 等でおっしゃっている「中間領域」の概念も、一部重なり合うものではないかと感じております。

私なりに単純化して考えると、個人と社会の関係性というものが変わっていく中で、これからは循環型の学びのようなものを考えていかなければいけないし、再帰的な学びの回路のようなものも非常に重要になってくるのだらうと。そこで文化的なコモンズによる中間圏の形成が求められてくるのだらうと思います。親密圏の際限のない肥大化をいかに抑えて、公共圏の著しい弱体化からどう回復していくかというとき、中間圏の部分を耕していくことを、文化的コモンズを梃子にしながら行っていくことが、必要になってきているのだらうということを感じています。

そのための生活文化や学びの回路のようなものを地域に組み込んでいくということが、コミュニティ・デザインに求められていると考えています。それによって、孤立や分断、社会的リスクを回避し、課題解決の基盤になっていくという関係性をつくっていくことが大事なのではないかと考えています。

4. 中間圏を耕すためのツールや場づくりの試み

中間圏を耕すためのツールや場づくりの試みという、抽象的で壮大なことを言いつつ、やっていることはとても小さなことなのですけれども、大阪の歴史の原点でもある上町台地をフィールドにした取り組みをご紹介します。

私なりに何ができるかということで、編集という手法用いて「上町台地 今昔タイムズ」というものを作り、関連するフォーラムなども開催し、地域に根差す知を共有していくことです。地域の中に、知の混交や共同化の場や回路をつくっていくことができないか、中間圏の種をまいて耕すということに何かしら貢献できないだらうかということで取り組んできました。

無形の記憶、有形のモノ、ネットワークと場というものを活用しながら、地域を形づくるさまざまな要素の関係性が生み出すダイナミズムとして、目の前にある地域の様相をまずは感受するということがとても大事なのではないかと考えています。一体のものとして捉えていくということです。それから、過去・現在・未来を貫いて、地域を俯瞰する視点を設けることで、立場や分野を横断するルートを開いていく、インターフェースとなる地域資源の役割に注目し、地域の方々と緩やかに連携し、知の共同化の回路を地域に組み込んでいく一助になればということを、思いとしては持っています。

文化的コモンズというべき資源が、上町台地境界では既にたくさん活動として展開もされているし、場所としてもいろいろあります。そのような実態がある中で、けれども、それらが属性を越えて横断的に知られ、活用され、そこが出会いの場になっているかという、必ずしもそこまでは至っていない状況もあります。それらをつないでいくことに少しでも貢献できないかということで、「上町台地 今昔タイムズ」の前史として行ったのが、実験集合住宅 NEXT21 の1階で、通りに面した小部屋のウィンドウを使ったウィンドウディスプレイで、2007年から2012年まで「まつり」や「遊び」や「野鳥」や「緑地」や「伝統野菜」や「ものづくり」や「水脈」や「減災」等々、地域の方々にご協力いただいて、

全 15 回の展示を行っています。

その後、2013 年から、「上町台地 今昔タイムズ」を梃子にしながら、地域資源の掘り起こしと巻き込みの重層化のようなことをやっていき、フォーラムもそれに関連して行うことで、「上町台地 今昔タイムズ」紙面だけでは深められない議論や関係者のネットワークのようなものを開拓し、つないでいくということをしています。

玉造黒門越瓜（しろうり）は、元々は上町台地からまちを考える会のメンバーでもあったオダギリサトシさんが普及活動に取り組んでいたものですが、そこでの出会いがきっかけで、NEXT21 でのウィンドウ展示でしろうりを紹介したことをきっかけに、顔の見える関係性の中で栽培の輪を広げていくといった取り組みに展開していきました。まさに、地中に根を張る、文化的コモンズともいべきネットワークの役割を果たしています。

5. 「上町台地 今昔タイムズ」Vol. 1～19 を概観する

さて、ここから、ざっと駆け足で「上町台地 今昔タイムズ」でどんなものを作ってきたか、眺めていきたいと思えます。

Vol.1 では、鉄道網の発達とともに急激に進んだ都市の拡大は、地域をどう変えていったのか、マクロな都市化の視点とミクロな生活実感の視点を接続し、果てしなく拡張していった市街地の変遷のプロセスをリアルな経験として共有することを目指しました。

Vol.2 では、都市の中心と周縁、コスモロジーを体感する行楽文化に着目し、都市と農村の機能分担と濃密なネットワークによって成り立っていた近世・近代のコスモロジーを、当時の行楽地・景勝地の位置をたどりながら明らかにしました。

Vol.3 では、まちなかの百貨店・商店街も人と人をつなぐ場だったのではないかとの仮説のもと、その具体的な関係性を、まちなかの暮らしと買い物にまつわるインタビューと数々の証言から描き出しました。

Vol.4 では、かつて生野区界隈に豊かな田園が広がっていたことを伝える記録画家・堤権次郎の作品群をフューチャーし、「大大阪」のフロンティアとして変貌を遂げた地域の風景を振り返り、人口減少期に入った都市の未来に改めて思いを馳せる機会としました。

Vol.5 では、身近なまちの映画館の盛衰の軌跡をたどり、空前の市街地再開発と賑わいの前線で、暮らしのすぐそばに娯楽の場・映画館が開かれていった「大大阪」を起点に、失われかけている戦前・戦後の地域の生活史に光を当てました。民間の施設、特に興行関係の施設の記録はほとんど残されていないため、ここでの資料の掘り起こしは小さいながらも貴重なものになっています。

Vol.6 では、近世に人気を博したなにわ名物“玉造黒門越瓜（しろうり）”誕生の背景には人が行き交うまちのドラマがあったことに着目、地野菜・玉造黒門越瓜の縁起を遡り、政権交代による土地利用転換、奈良・伊勢への出入り口に位置する地の利が生んだ名物誕生と復活の物語を描き出し、食と農と暮らしのこれからを展望しました。

Vol.7 では、上町台地で今につながるものづくりの源流から、芸能ともものづくりの申し子ともいべき「生玉人形」をはじめ、郷土玩具の数々を生んだ風土に、創造都市・大阪の原風景を見出しています。

Vol.8 では、お地蔵さんの習俗・文化からコミュニティの回復力を担保する知恵に迫りました。幾多の時代の荒波を被りながら蘇り続けるまちのお地蔵さんの姿と、新たなつなが

りを模索して息を吹き返す地蔵盆の取り組みを追い、コミュニティのレジリエンスを考えています。都市のコミュニティをつくっていくときに、新たに集まってくる人たちを結合し、また何らかの事情で外れてしまった人を再度結合するためのツールとして、お地蔵さんというものが、大変重要な位置付けで活用されていたことが、かつて南木芳太郎さんが発行していた郷土誌『上方』に投稿されている調査などからも見えてきます。そのような可能性に体感的に気づいている人たちは、今、都心部のコミュニティをいか再結合していくかという課題に対しても、地蔵盆をうまく活用していかれている様子が見えてきて、非常に面白いと思っています。

Vol.9 では、本のまち・大阪の通史から未来を見つめようと、古代・世界に開かれた最先端の“知”の港に始まり、近世・近代には時代に先駆けた“知”の開拓者や媒体を生み出したまち・大阪を振り返り、その原点・上町台地からこれからのありようを問うています。

Vol.10 では、人と風土、人と人が交わるモードとしての「食」（名物・名所）から都市の本質を読み解くために、幕末・大坂の博覧強記の絵師・戯作者“暁鐘成”のまなざしを通して、「食」と都市の関係に迫り、改めて都市に求められる機能と価値を捉えなおす機会としました。

Vol.11 では、考古学の発掘調査の成果から、まちづくりを魁（さきがけ）た、ものづくりの都・大阪の実像に迫りました。上町台地の谷々に最先端のものづくりの工房が集積した古墳時代に遡り、近世の大阪城下町が技術と文化の連鎖する高密度な共創空間であった様子、まちの中でいかに商品開発や市場のリサーチをしていたかなども見えてきます。そして、さらにその先へ、未来のまちづくりを展望する土台なればとの思いを込めました。まちなかでの発掘は大変な困難を伴いますが、大阪は素晴らしい蓄積を持っているのです。個々の発掘成果をパズルのように組み合わせる面的なアプローチを行っているわけですが、非常に面白い成果が見えてきていてもほとんど市民に知られていないため、市民に伝える役を担えればとの思いが企画の背景にありました。

Vol.12 では、大阪・関西万博が近づいてきている中で、都市再起動するグランドデザインとは、大阪・上町台地を視点場に、博覧会“百年の計”からその先を展望することを意図しています。実は、20世紀前半、上町台地は博覧会の宝庫でした。なぜ上町台地で博覧会がこれだけ開かれているか、どういうコンセプトで行われていったかということ、戦争や震災も絡めながら振り返っています。

Vol.13 では、20世紀初頭、新たな技術と歴史・文化・風土が融合し、モダン大阪の時代精神を開花させた新星たちの点と線をたどり、超時空遺産を再評価し、未来へのレガシーとは何かに迫っています。

Vol.14 では、災害とともに歩んできた都市の姿として、都市づくりの一方の極に博覧会があったとすると、もう一方の極に大災害があったことに着目。過去の大災害が、誰によってどのように伝えられて来たかといった一面も振り返り、今後の社会に向けて、真のレジリエンスとは何か、減災文化としての“共”の知を伝え、“共”の場を耕す取り組みを紹介しています。

Vol.15 では、激変する社会の歪みに果敢に向き合い時代を画したソーシャルワークの歴史を未来につなぐことを意図しています。大阪・上町台地周辺には、近代日本を支えた数々の社会事業の足跡が刻まれています。コロナ禍の今こそ、苦難の中で人々の未来を拓いた

先人たちの営みに学ぼうとの思いを込めています。大阪は社会事業のパイオニア的なまちだったのですが、その歴史がほとんど忘れられてしまっています。改めて振り返るとともに、今、身近な場所で特徴ある取り組みをしている人を紹介しています。

Vol.16 では、近世から近代へ、戦災や災害から復興へ、大阪のまちの歩みと深い絆で結ばれてきた「相撲」と上町台地の関係性に着目。安寧を願いまちの生命力を引き出してきた役割を浮き彫りにし、まちの発展の基盤、風土の力を考える機会としています。関連して開催したトークライブでは、どのように都市の流動民と定住民とが関わって、都市や農村の営みを支えていたのか、「相撲」と都市・農村社会との関係性を通して読み解いています。

Vol.17 では、万葉集から近現代に至る和歌・短歌の多彩な実践に、心の壁を越える言葉の力の本質を見るという意図で、古来、歌枕の地として人々を惹きつけてきた難波津と上町台地、時代に寄り添ってきた有名無名の言葉の連なり、対話を促す方法論に、今日的な価値を見出しています。和歌・短歌をテーマにしていますが、きっかけは、肥田皓三先生という、大阪・上方文化の研究の第一人者が2021年春に亡くなられたことです。島之内の商家のお生まれで、大阪を代表する真の文化人と言える方でした。追悼の想いから、和歌・短歌を入りに、肥田先生が教えてくださった与謝野鉄幹と晶子の歌のエピソードや西行の歌のエピソードなどを柱にしながら、万葉集までさかのぼり、また現代の上田假奈代さんをはじめとして、面白い活動を短歌等を用いて取り組んでいる方々を紹介し、言葉を通してつながっている地平のようなものを描いていきました。異なる関係性、立場にある人たちが、短歌に代表される簡易な定形によって結び合っていくことの面白さを洗い出していくといったことを行っています。

Vol.18 では、四天王寺と貴種流離譚に着目しています。元々高貴な人が、いろいろな苦難を背負って零落し、旅に旅を重ねて、最後に再生していくような物語が、歴史的にも世界的にも定形としてあります。日本では中世にそうした物語が語り芸・説教節として庶民の間に広まり、時代が下ると芝居や小説などに姿を変えて人気を博していきます。説教節の主要な物語で、その舞台や重要な場所として四天王寺が位置付けられています。それはなぜかということを探っています。人が再起していくための物語や救済の場がいかに必要であるかということ、差別される立場に置かれた当事者の語りが人の心を動かし、物語の共有の幅を広げていくということを描き出そうとしていった試みでもあります。また、現在のまちなかで、紙芝居や演芸や読み聞かせやストーリーテリングなどを通して、ともすると孤立しやすい社会の中で、つながっていく場をつくる活動をしている人たちを紹介しています。

目下編集している Vol.19 では、民俗学者であり、国文学者であり、歌人でもあり、小説家でもあった、知の巨人・折口信夫をフューチャーしています。折口学とも称される、コスモロジーの原点は大阪・上町台地にあったことに着目。「まれびと」「常世」などの概念を生んだ風土、折口信夫を育んだ都市・大阪の再評価を意図しています。

折口が大阪で暮らしていた頃のことは、あまり知られておらず、生まれ育った大阪ではほとんど忘れられてしまっています。しかし、この人が大阪でどういう幼少期・思春期を送ったかということを見ると、間違いなくこの人のその後の研究活動・創作活動の原点になっていることが推察できます。この方は、大阪を「野生の都市」という呼び方をしてい

て、野生の都市だからこそ、新しいものが生まれてくるという見方をしているという点も再評価に値する部分だと思えます。

6. 現在へのフォーカス：「上町台地 今昔タイムズ」Vol. 14, 8, 6 から

ここから、少しだけ現在の取り組みにフォーカスして、「上町台地 今昔タイムズ」Vol.14 と Vol.8 と Vol.6 で具体的にどんなことを紹介しているのかをお話しします。

まず、Vol.14「減災文化を耕す 地域に根差した“共”の場づくり」で、紹介している事例を5つご紹介します。1つ目は、北大江公園（大阪市中央区石町）での公園を核とした長年に渡る関係づくりの試み、都心でのコミュニケーションの模索で、まさに防災といわない防災の実践が重ねられています。2つ目は、高津宮（大阪市中央区高津）での伝説の井戸を復活する試みで、井戸掘りから新たな縁が生まれています。3つ目は、ももに広場（大阪市生野区勝山北）での木造密集住宅市街地での防災力向上にも役立つ地域広場の多様な活用で、まちの風景と多世代のつながりを豊かにしたいとの願いがこもっています。4つ目は、松野農園（大阪市生野区生野東）での食と農の体験を基盤にした交流と多文化共生の実践で、空き家を活用しその庭をコミュニティ農園として、様々な立場の人がゆるやかにつながって、互いに必要なときには助け合える居場所づくりが行われています。5つ目は、ゲストハウスとカフェと庭 ココローム（西成区太子）での、日雇い労働者のまちで暮らしてきたおっちゃんたちを先生に井戸掘りの真価を探求した取り組みで、釜ヶ崎の知恵と技で尊厳の回復とともに減災力も育まれています。

Vol.8のお地蔵さんについては先ほども少しお話ししましたが、そもそもお地蔵さんというものが持っていたコミュニティ再結合の役割のようなものを、うまく現代的に生かしていらっしゃる人たちがいるということが大変興味深いところです。「新しい縁を結ぶ 地蔵祭の再起動 現代を生きる人々の願い、コミュニティの再生へ」として、5つの事例を取り上げていますが、ここではそのうちの3つをご覧ください。1つ目は、将軍地蔵尊（大阪市天王寺区上本町）の地蔵盆と同日に五条小学校（天王寺区上本町）校庭で開催される「子ども盆踊り大会」。2つ目は、空堀商店街界限（大阪市中央区谷町・上本町西）の路地のつながりを感じる地蔵盆のナイトツアーの試み。3つ目は、一心寺（大阪市天王寺区逢坂）での、誰でも参加できるまちの広場のような地蔵盆フェスティバルの開催です。また、Vol.8のお地蔵さん関連のフォーラムでは、各地のお地蔵さんや地蔵盆をめぐる知恵の共有とネットワークの形成に役立つことができるように、歴史・民俗のナレッジと、まちづくりの現場の担い手の想い、さらに担い手予備軍をつなぐ、ブリッジングを意図して、多彩な面々にお集まりいただき、情報共有を行いました。京都をフィールドに地蔵盆の調査研究を続けていらっしゃる前田先生もご参加くださいました。

Vol.6では、かつて都市化の波にのまれ、玉造の地から姿を消した玉造黒門越瓜（しろうり）が、玉造稲荷神社を舞台に、百年の時を経て蘇り、人々を包摂する再生のダイナミズムに注目しています。同神社の協力のもと、弊研究所（CEL）がコミュニティ・デザインの実践研究の一環で取り組んでいる、「玉造黒門越瓜“ツルつなぎ”プロジェクト」は、しろうりを育て合い・ともに食し・交流の輪を少しずつ広げる取り組みですが、世代や立場を越えた、多様な知の交流の場になっています。ネットワークを耕し続けることで、社会課題の認識が広がり、僅かながらも課題解決への気づきの芽生えや、生活行動の変化にも

つながっているように感じます。コロナ禍になってからは、生活環境が急変する中で、つながりを担保する Instagram「みんなの瓜畑」の開設や、オンラインでの収穫祭の開催などを通して、地域や世代を越えた経験やスキルの共有、ネットワークとコミュニケーションの拡張、意識・行動の変化などが見られました。

これまで紹介してきた「上町台地 今昔タイムズ」を梃子にした一連の取り組みは、少々大げさな言い方になりますが、文化的コモンズの掘り起こしや活用、中間圏の耕しに多少ともつながっていくツールや場になればとの思いで行っているささやかな取り組みです。小さくとも知の編集（共同化・再起動・モード化）の回路を、身近な暮らしの場に組み込んでいくことによって、新たな人との交わりや暮らし方や生業の生成や循環を促す一助になればと、おぼろげに思っているのですが。相手は人であり、まちであり、単純な話ではありませんが、あえて示すとすればそのようなイメージを持っています。

7.What? 文化の本質を考えるために

○民俗学の先達たち・継承者たちのアプローチに学ぶ

「What? 文化」というのが、本日の私に与えられたお題です。今日は自分がやってきた拙い取り組みをご紹介するレベルにとどまっています恐縮ですが、今後もう少し深めて考えていきたいと思っています。文化という概念はあまりに幅広く、多様な捉え方や論点があって、際限がないのですが、参照点の一つとして、国際的な政策議論における文化の位置付けにごく簡単に触れておきます。

ユネスコの世界人権宣言や国際人権規約に始まって、文化権の概念の普及活動が行われ、国際的な立場で、ユネスコが文化政策をリードしてきました。1982年の第2回世界文化政策会議では、七つの重点を提示するということが行われました。①文化的アイデンティティの尊重、②文化政策における民主主義と参加の重要性の確認、③文化的発展を社会発展の目的それ自体として捉える新しい価値観の提起、④文化と教育の相互関係の強調、⑤文化と科学技術、⑥文化とコミュニケーション、⑦文化と平和の関係 です。

この流れの中で、1980年代以降、先進国においては、低成長社会へ移行していく中で、産業としての文化というものが重視されはじめていくという動きが顕著になりました。一方、開発途上国においても、経済発展の資源として文化遺産の重要性が強調されはじめていくという流れが起きて、現代に至っています。

1998年には、ユネスコ国際会議において、社会の持続的な発展のために、文化政策を各国政策の中心部に位置付けることが合意されています。経済・環境・文化の連携による、持続可能性の実現が共通目標になっていきます。

また、国際博物館会議では、2022年のプラハ大会で、博物館の定義の大幅改正が行われています。博物館の役割における大きな変化として、包括性、コミュニティへの参加、持続可能性の重要性があげられています。

博物館の定義は、これまで先進国がリードしてきた分野ですが、新興国や発展途上国がマジョリティとなり、世界の力関係が大きく変化していくなかで、植民地主義に根を持つ博物館のままでいられないことは明らかで、そこからの脱却と新たな社会づくりへの貢献が志向されています。

1980年代以降の文化政策の流れと並行するような形で、思想家の発言にも特徴的なもの

が見られました。一例ですが、日本との関わりが深い人ということで、フランスのオギュスタン・ベルクが、建築やまちづくり分野でも 1980 年代から 1990 年代ぐらいに注目されました。和辻哲郎の「風土」論を活用しながら、近代的なパラダイムとは異なる関係論的なパラダイムをつくっていく必要があるのではないかと提唱し、風土圏・生態圏を合わせて、住まい・都市を考える視点の重要性が説かれています。これは、日本の風土で培われてきた民俗文化を今日的な意味で再発見・再評価していくことともつながる話なのではないかと思います。

一方で、文化政策の展開の中では、ヨーロッパを中心に芸術文化の役割の再定義も進みました。国際博物館会議の話も関係しますが、権力者による統治の象徴・権威としての芸術文化から、市民的公共圏を築く、持続可能な地域社会のローカルガバナンスを涵養するための文化的コモンズの核として芸術文化を位置付けるという流れが強くなってきています。例えばドイツの文化政策の研究者・藤野一夫先生など、社会構造政策としての文化政策の在り方を提唱され、今、芸術文化観光学の構築を牽引されています。

それから、災害が多発する中で、災害や医療、福祉、レジリエンスやケアと文化の関係性も、言わずもがなですけれども、非常に大きなテーマになって、関心が集まっています。

先ほど、民俗学の取り組みのようなものを再評価する必要があるのではないかという話をしました。私は不勉強ですが、大きな学びがありそうだなと感じているところです。例えば、柳田国男は、行政マンとしての立場もあり、民俗学者であると同時に今でいえば政策科学者としての一面を持っていることに目を向けることは大事なことなのだろうと思います。

赤坂憲雄さんが解説をされている『都市と農村』という本では、柳田国男が、都市と農村の関係の中から社会の在り方を変えていかなければいけないということを提唱しています。例えば協同組合の運営や地方都市の連携を言っていて、現代においても示唆に富み、そのようなところに光を当てていくべきだということを赤坂さんは言われています。その中で赤坂さんが、このような柳田の言葉に注目すべきではないかということをおっしゃって、なるほどと思ったのが二つぐらいありました。これだけ見ると意味が分かりにくいかもしれませんが、前後を読まれるとよく分かります。「全体村持の野山などは、民法がそれを共有と視たというのみで、単なる共同の私有物ではなかった。不断は何人もわが有とっておらぬ点に、村を結合せしむる本当の力があつた」ということです。これは入会地などが、非常に窮乏した人たちの救いの場であって、そのために何人のものもないという形で取っておいたということが、実は村の求心力になっていたということを言っています。それを単に分割して譲渡していくということをしたことは、どれだけ罪深いことかということを行っています。

それから最後に赤坂さんが、これを書いて、柳田国男とは一体何者であろうかということを行っているのが、大変興味深かったのですが、「自分で考えたことのない多数決を作ってはならぬ。それに服従しなければ、叛逆と認められるような無用の畏怖心を抱かしめてはならぬ」ということを言っていて、現在の民主主義の在り方に対して物申してくれているような気さえる言葉です。社会が変化していく中で、ものすごく思索し、動いた人なのだなということを感じます。

それから『「小さきもの」の思想』は、柄谷行人さんが編者の柳田国男のアンソロジーで

す。柄谷行人さんは、柳田国男を読み直さなければいけないということを若いときから言っていて、最近改めて本を出したりされています。「柳田は詩人、官僚、ジャーナリスト、民俗学者と移動と試行錯誤を続けながら、生涯にわたって、資本と国家を乗り越える『来るべき社会』を追求していた。その『可能性の中心』がくっきりと浮かび上がる、まったく新しいアンソロジー」というのが本の紹介文です。私たちが一般的に思っている柳田国男というものとは、別の顔の部分に今こそ目を向ける必要があるのではないかとおっしゃっていることは、腑に落ちます。

もう一人は宮本常一です。私と同じ山口県出身、瀬戸内出身の方ということもあって、シンパシーを抱く方でもあります。宮本の代表作『忘れられた日本人』の解説で、網野喜彦さんは、文字を持つ伝承者としての自覚を持つ宮本常一に着目しています。宮本常一が地方を歩いて調査していた頃、お年寄りや貧しい人の中には、読み書きができない人も結構いました。そのような社会状況でした。その中で、「無字社会」と「有字社会」の関係性と規定した問題を見だし、双方の伝承者の性格の違いを追求すると語られています。宮本はもちろん有字側ですが、有字の伝承者はともすると村の中で孤立しやすいことも知っている。そのために、外部の同じ字を書ける人たちと文通したり、結束して、村の外につながる窓となって村に貢献する。そのような役割を果たすということに、宮本は注目しているというわけです。実際そのような人たち取材して回っています。今の社会では、多くの人は文字は読めるのですが、それでは外国人はどうか、ITが使えるか使えないかなど、いろいろな視点に立ったときに、結構似たような問題が起きている社会なのではないかという気もして、改めて学んでみる必要があると感じています。

解説者の網野喜彦さんは、民俗学も歴史学と一緒に、資料を収集して分析する科学的手法と、それを踏まえつつ、語る民俗誌、生活誌の叙述というもの、その双方で学問として完成すると考えていると述べています。その点に置いて、宮本常一はもちろん分析的なことでもできるのだけれども、間違いなく後者において卓越した力を持つということを言われていて、そのとおりだと思います。やはりその両面をどのように使いわけていくか、連携していくか、そのようなところが非常に重要なのだなということ、改めて思っているところです。

それから、前にも少し授業で紹介しましたが、神戸にあった海文堂書店の方が、宮本常一の出身地でもある周防大島に移住して、みずのわ出版という出版社を新たに立ち上げて、面白い本を出されています。みかんづくりなどの農業をしながら本を出すという新しいライフスタイルを探求されているようです。そこで『宮本常一ふるさと選書』を出されていて、その第1集が『古老の話を聞く』というものです。これも改めて読むものすごく面白いです。かつて周防大島の人たちは、世間師といって、いろいろな職業や技術を持って各地を渡り歩いて、そこで得たものをまた島に戻すという役割をしている人がたくさんいたというのは、以前から語られてはいるのですが、それだけにとどまらない、旅する人たち、移動しながら生きる人たちの面白さみたいなものがあります。そこには、私たちが定住という概念に縛られている発想とは全然違う生き方や暮らし方があり得るのではないかと、感じさせてくれるものです。

もう一人が、姫田忠義という、宮本常一の弟子だった人です。数年前にお亡くなりになりましたが、民族文化映像研究所（民映研）を率いて、日本の高度成長期にどんどん失わ

れていった各地の民俗文化を必死に記録して回った人です。この方は神戸の和田岬の辺りの出身の方です。たまたま、私は阪神・淡路大震災の直後ぐらいから、「阪神 民映研の映画を観る会」の運営に参加していました。きっかけは、偶然の出会いですが、避難所などで地震に遭った子どもたちと絵を描く会を開いていたアーティストたちが民映研にとっても興味を持たれて上映を始められたもので、その方たちに誘われて、「私も、美術にも民俗学にも関心がありますので、一緒にやります」と言って手伝い始め、何年間か年に数回民映研から16mmフィルムを借りて、映写機を回して上映会を開いていたのです。

そのおかげで、姫田さんにお会いすることもできました。この方のお仕事や語りから得られるものも、大変大きいです。例えば、著書『ほんとうの自分を求めて』は、1977年に書かれたものです。その中で、「萱野さんたちアイヌとの出会いは、私に、それまでの旅では感じることでできなかったあるふかい体験をあたえてくれた。それは、日本人として生まれ、生きてきた私自身を、その根底からゆさぶるものであった。日本とはなにか。日本人とはなにか」ということを書かれています。アイヌが国家をつくらなかったということ、私たちはもっときちんと考える必要があるのではないかと、今こそ大いに学ぶ必要があるのではないかとということもおっしゃっていて、非常に深い間です。

写真は民映研の映画のパンフレットです。1996年時点のパンフレットで、97作品を収録しています。その後も制作され、100作品を越えています。30分ぐらいのものから、何時間のものまでいろいろですが、基層文化を撮るということをポリシーにされていて、貴重な記録ばかりです。

今、姫田さんの薫陶を受けた次世代も活躍されています。ささらプロダクションを立ち上げたプロデューサーの小倉美恵子さんと監督の由井英さんです。彼らの作品で高い評価を受けた映画「オオカミの護符～里びとと山びとのあわい～」は、公開初期に應典院でも上映されましたが、話題になる前で観客5名くらいでしたが、私は大いに刺激を受けて、深く記憶に刻みました。その後、東日本大震災を経て、この映画の上映会は息長く全国各地に広がっていき、小倉さんによる同名の書籍も発行され、同書はロングセラーとなって単行本化もされています。

2012年に、私はたまたま東日本大震災の被災地・陸前高田を訪ねたのですが、そこで奇遇にも小倉さん・由井さんに出会います。陸前高田を流れる気仙川の上流で、流れ橋（板橋）の架け替え作業をしていた現場に、新作「ものがたりをめぐる物語」の撮影に来られていたのです。私がかつて民映研の映画の上映会を開いていたことを告げると、大いに驚き喜んでくださって、それ以来とても親しくして交流しているのです。

「オオカミの護符」の次に撮られた「うつし世の静寂（しじま）に」という映画も、「オオカミの護符」と同様に、大都市・川崎市内北部の片隅で今も受け継がれている旧住民の暮らし、念仏講や巡り地蔵の風習を伝え、100年ぶりに奉納された獅子舞を追っています。境界を越えて地蔵を回していく、コミュニティ間の関係性の構築の知恵といますか、示唆に富む生活文化が記録されています。

今ちょうど上映が始まっていっている「ものがたりをめぐる物語」は、その直後ぐらいに撮りはじめられたものです。ところが、東日本大震災で縁のあった多くの地域が途方もない被害を受け、大変な衝撃を受けられて、復興の方向性にも疑問を抱かれ、映画のあり方も考え直していかれました。なんと、それから10年以上かけて、昨年ようやく、諏訪を

主な舞台にした前編と、陸前高田を主な舞台にした後編の大作として完成しました。

昨年12月には陸前高田でも地元の人たちが主催して、上映会が開催されました。やや観念的な作品にはなっていて、前作までのドキュメンタリー調のものとは手法も違うのですが、悩みに悩まれた10年余の間に、物語の起点となっている諏訪地方の産業や生活文化を丹念に取材して歩かれ、『そもそも、』という冊子を発行され、それをまとめて『諏訪式。』という本も出版されています。この『諏訪式。』も、各方面で書評も書かれて注目を集めています。

小倉さん・由井さんは、先達の民俗学者たちがなし得なかったことをやろうとされているところもあって、記録映画を撮る、本を出版するというだけでなく、現在のICTを活用して、地に足の着いた民間の知の共有をしていきたいと、真剣に取り組まれていると実感します。

○“カルチュラル・コンピテンシー”概念の広がり注目する

最後に、今、1980年代生まれの若い世代で、編集者・クリエイティブディレクターとして活躍されている、花井優太さん・鷺尾和彦さん編著の『カルチュラル・コンピテンシー』という本を紹介して終わりたいと思います。

コンピテンシーは、汎用力、実践力と訳されることが多いようですが、花井さんは同書のイントロダクションで「カルチュラル・コンピテンシー」について、次のように説明しています。「「カルチュラル・コンピテンシー」とは、もともと、主にソーシャルワーカーの間で使われてきた言葉である。文化や民族の多様性を十分に認識し、差別・抑圧・貧困・その他の社会的不正義をなくしながら、相談者に寄り添う。個々の相談者の課題と前提を理解した上で向き合うとも言い換えられるはずだ。この考え方をビジネスやソーシャルデザインにも持ち込めないかという発想が、本書の出発点にある」「「カルチュラル・コンピテンシー」を起点に、人間の営みとしてそこにあり続けてきたものの価値を捉え直し、育てていけば、時代や状況が変わっても揺らぎに対応しやすい経済をつくることのできるのではないだろうか。」

例えば、移民が多いドイツでは、どのように文化的な体験をしていくか、共有していくかという教育の考え方として「カルチュラル・コンピテンシー」という概念が導入されていったとされています。ドイツの文化政策分野では、そのような教育の考え方として使われると同時に、「特に多様・多文化・多層社会における幅広い文化の担い手を議論する文脈で、カルチュラル・コンピテンシーが、個々の住民の『力』を再考し、定義づける鍵概念として、模索されていきました。・・・住民が文化的生活とコミュニティを主体的に形成していくにあたって獲得を目指す『力』の地平として位置づけられていました」。これは秋野有紀さんという共著者でもある研究者が『カルチュラル・コンピテンシー』を紹介されている文章から抜粋したものです。秋野さんは同書の中に「民主社会とこれからの経済の土壌としての文化」という文章を寄稿されています。

同書の中で、鷺尾和彦さんが、未来学者のスチュアート・ブランドが示した図を紹介しています。下から上へ「NATURE」「CULTURE」「GOVERNANCE」「INFRASTRUCTURE」「COMMERCE」「FASHION」が層をなし、従来のビジネスのアプローチは「COMMERCE」「FASHION」の部分で行われてきたが、カルチュラル・コンピテンシーのアプローチは、

「文化の層に触れ、その意味や価値を耕すことによって、未来に向けてやるべきことを進める自信と健やかさが育まれる」と提唱されています。そのようなことが語られる時代になったのだと、感慨深く思いました。こうした若い世代の動きにも注目していきたいと思っています。

まだこれから考えなければいけないことだらけなのですが、民俗学の先達たちの営みは、激しい近代化の波の中で模索されてきて、考えてみるとコミュニティ・デザインの理論と実践でもあり、カルチュラル・コンピテンシーが追求されていたと見てもいいのかもしれないと思っています。

その苦闘の中には、いつの時代においても、人間がコミュニティや生活や文化を語る時に直面するジレンマが濃密に反映されていて、政治や思想、差別、異文化、ジェンダーに対するスタンス、負の歴史に対するスタンスなど、これらのジレンマに彼らがどう向き合ってきたかということを見ることは、現代におけるカルチュラル・コンピテンシーを考え実践し、未来への糧としていく上でも、大きな手がかりになるだろうと改めて考えています。

————— ありがとうございました。

※同ワーキング（3rd フレーム_A）は、2023年2月20日（月）大阪ガス御堂筋東ビル会議室にて行い、高田光雄（途中退出）、山口洋典、川中大輔、前田昌弘、弘本由香里が参加した。